

うんてい

(うんてい復刊) 第3号  
平成22(2010)年12月28日

## 巻頭のことば

## リサイクル図書

私は、古書のネットショップである本を求めた。その本が送られてきて、包みを解いたとき、すこし、「おやっ？」という気持ちが胸をよぎった。その本には、ある公立図書館のリサイクル図書というラベルが貼られていたからである。

リサイクル図書とは、図書館で、複数所蔵している本や、発行からかなりの年月のたった雑誌などを、来館者に無償で与える書籍のことをいう。図書館のスペースに限界があることを考えると制度としては、認めてもよいように思う。だが、原則論からいえば、図書館が個人に無償で蔵書を与えるのは、いかがなものだろうか。本来、図書館は書籍を集めるところである。処分することは、自殺行為である。各地各種の図書館に問い合わせ、互いに足りない書籍を交換するなりして、蔵書を一冊でも多くして充実をはかるべきである。雑誌の場合も、簡単に処分すべきではない。ただ、定期的に刊行されるので、たちまちのうちに、図書館の書庫のスペースを占拠してしまうのが実情である。しかし、

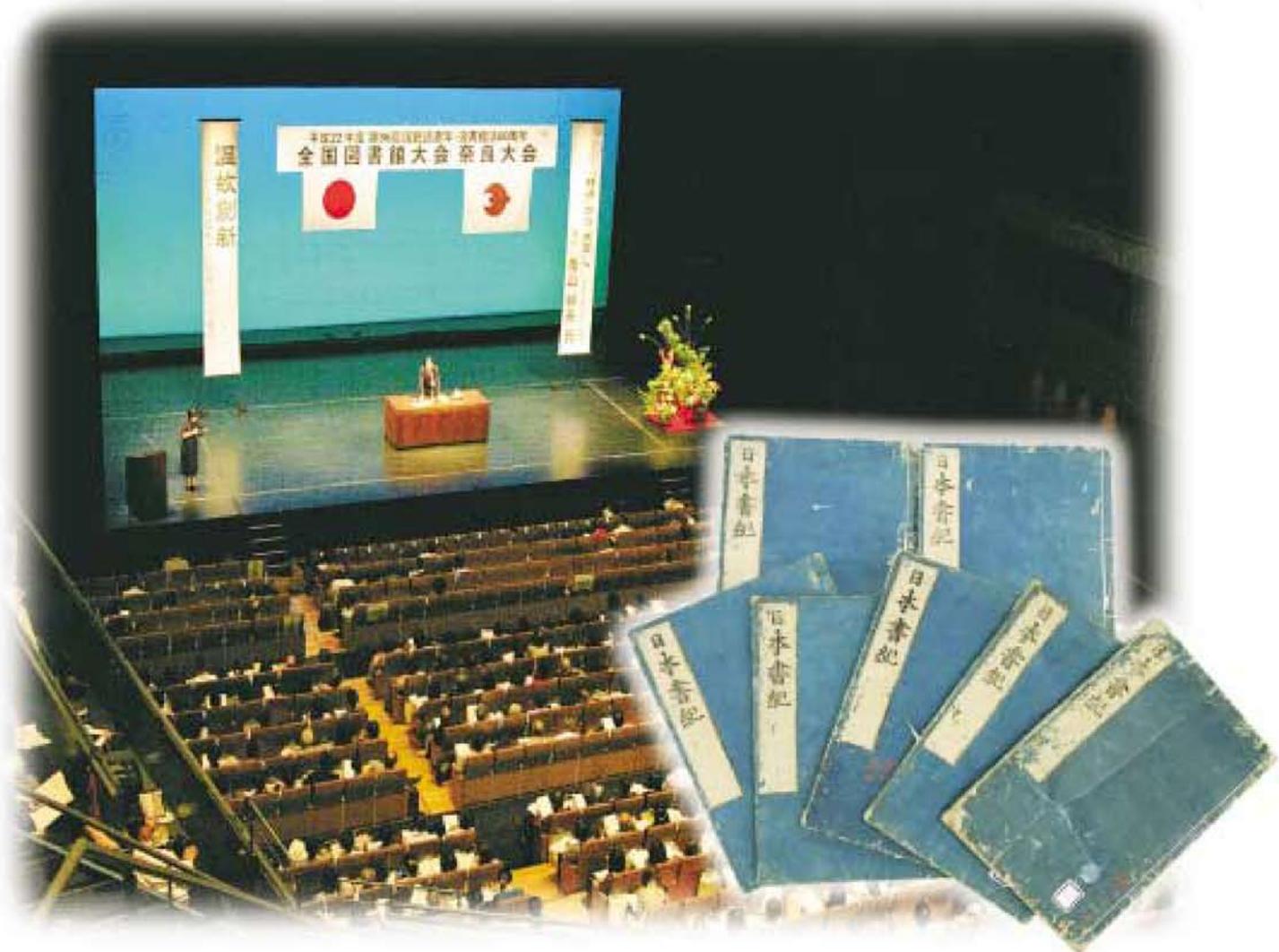
奈良県立図書情報館 館長 千田 稔

古い雑誌の価値が低くなるのは、自然科学系の学術雑誌ならともかく、一般向きの週刊誌などは、貴重な資料となる。デジタル化など、一層の工夫をはかるために、関係者は努力するのが、任務というべきであろう。リサイクル図書という言葉に、図書を効率よく処分しようとする、関係者の安易な姿勢をうかがうことができる。

そこで、話は、私が買った古書のことにもどる。この本は、ある公立図書館で無償で得た人物が、それを古書店に売り、その後は古書店の流通システムにのったものであるにちがいない。とすれば、その人物は、どの程度の価格で古書店に売り渡したかはわからないが、リサイクル図書は、わずかなりとも、金稼ぎのために使われたと断定してよい。このような実情がある限り、リサイクル図書の制度は再考すべきである。近年の日本人は、リサイクルという言葉に、いかにも正義感をもつようであるが、言葉で満たした本を取り扱う図書館で、言葉はもっと丁寧に使われるべきであろう。

## Contents

- ・ 図書情報館開館5周年の歩み トピックスで綴る5年間 . . . . . 1
- ・ 平成22年度第96回全国図書館大会奈良大会 . . . . . 3
- ・ “システムだより” 館内パソコン環境を一新 . . . . . 4
- ・ “文書だより” 「市町村廃置分合一件」 . . . . . 5
- ・ 奈良のもの・ひと③ 奈良のイチゴ . . . . . 6
- ・ 図書館情報館で調べる レファレンス事例紹介〈第3回〉 . . . . . 7
- ・ 陝西省図書館訪問記 . . . . . 8
- ・ 超！図書館！ 事業展開の軌跡 . . . . . 9



## 写真解説

### 平成22年度第96回全国図書館大会奈良大会開催

平成22年度第96回国民読書年・図書館法60周年全国図書館大会奈良大会は、9月16日、17日の両日、「温故創新—平城遷都千三百年からの発信」をテーマに、奈良市のなら100年会館をはじめ、奈良女子大学、帝塚山大学学園前キャンパス、奈良県立大学の3大学と県立図書館情報館を会場として開催されました。

今年は、平城遷都1300年という記念すべき年であり、古都奈良が1300年祭で賑わいを見せている中での開催となりました。また、国民読書年、図書館法施行60周年、「子ども読書年」から10周年と図書館界にとっても節目の意義深い年となりました。奈良時代にわが国最初の公開図書館「芸亭院」が創設された当地から、これまでの図書館の歩みを振り返り、そこから新たな可能性・方向を探り、創造していく機会となることを希っての本大会の開催となりました。大会には全国から約1700名の参加があり、関連諸行事の開催とともに、分科会での活発な意見と議論や情報交換が行われました。  
(鈴木 陽生)

### 日本書紀

寛文9(1669)年版の日本書紀。30巻15冊。四つ目袋綴、縹色、無地の表紙、大本(27.4×19.2cm)、四周双辺、半面8行、柱題：日本紀。

奈良時代に編纂された神代から持統天皇に至るまでを収録した日本最初の勅撰歴史書。伝本は古写本では断簡も含めると平安時代にまでさかのぼるが、30巻完本として伝承されるものは少なく、内閣文庫に所蔵される永正本が現存最古といわれる。系統は平安時代からの古写本と鎌倉時代以降に卜部家の校訂を経た卜部家本の2系統に分けられる。

江戸時代になると卜部家の系統の本文と傍訓とを伝えた三条西実隆の本の系統を基に各種の校訂本が刊行された。その最初は神道思想を反映して慶長4(1599)年に刊行された神代巻2巻である(慶長勅版)。この後慶長15年の木活字版、これに訓点を加えた寛永ころの整版本があり、その重刻の寛文9年版が本書で、京都の書肆武村市兵衛、村上勘兵衛、山本平左衛門、八尾甚四郎が出版したものである。江戸後期には国学の発達で、多くの版本が出版されるが、いずれも寛文9年版を基にして普及した。文中には春日社家中臣祐俊が朱書きで誤植を訂正し、傍訓を追加している箇所がある。奈良県立奈良図書館が本書を受け入れたのは昭和12年3月である。  
(大宮 守友)

この5年間のトピックスを、それぞれの年ごとに写真も交えながら紹介します。

### ◆平成17(2005)年度

- ・図書館情報館のオープン (11月3日)
  - ・さだまさしさんを迎えての開館記念講演会 (11月26日)
  - ・上村淳之さんから「四季花鳥図」贈呈される (12月16日)
- 「四季花鳥図」は当館2階メインエントランスホールに設置されています。



- ・鷺田清一・西村佳哲さんを迎えての開館記念トークセッション (3月18日)

### ◆平成18(2006)年度

- ・千田稔館長による公開講座「図書館劇場」スタート  
奇数月の第4土曜日に開催され、千田稔館長と多彩なゲストを迎えた講座は、現在も好評開催中。



- ・ビジネス経営支援を開始  
特許情報講習会、特許無料相談会スタート  
中小企業診断士を迎えての無料相談会スタート
- ・西村佳哲さんによる「働くことを考えるセミナー」スタート  
※平成20年度から「自分の仕事」を考える3日間
- ・文書館機能を活かし、「古文書講座」スタート
- ・エントランス・ホールを活用した音楽イベントを開始  
故河合隼雄さんを迎えてのフルート演奏会 (6月2日)

### ◆平成19(2007)年度

- ・資料の遠隔地返却サービスを開始 (4月)  
※図書館で借りた資料を県内市町村立図書館等で返却していただけるようになりました。
- ・入館者100万人達成 (10月21日)
- ・図書館で衝撃のファッションショー!  
tribute to 光明 Fashion Show (11月10日)  
2階吹き抜きの大階段と2階のフロアを舞台に行われました。



### ◆平成20(2008)年度

- ・県民への情報発信充実、県民お役立ち情報コーナー設置 (6月28日)
- ・音楽イベントの展開加速!  
岡本麻子ピアノ・リサイタル (8月9日)  
西谷牧人チェロ・コンサート (11月24日)
- ・県内大学図書館との連携を開始  
奈良産業大学との相互協力協定の締結 (12月24日)  
※以後、奈良女子大学、奈良教育大学とも締結
- ・図書館を使った芝居を好演!  
「劇的☆めくるめく図書館-ならノれきしデたわむれロ」 (2月28日)  
大階段を中心に館全体を舞台にして一つの劇が行われました。



- ・市内ホテルとの連携で観光振興にお手伝い  
ホテル日航奈良への千田館長選定本の特別貸出
- ・済生会奈良病院との連携事業を開始  
済生会奈良病院長による無料医療・健康相談会スタート  
「医療・健康情報コーナー」を一般開架棚に設置

## ◆平成 21 (2009) 年度

- ・花鹿（嘶家）を大事に！  
「図書館寄席 <sup>はなしかのうんてい</sup> 花鹿乃芸亭」スタート
- ・奈良県立図書館創立 100 周年記念イベントを開催  
「ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル弦楽四重奏の夕べ」開催（7月23日）  
「奈良を考える～図書情報館から考える3日間」  
（11月21～23日）  
シンポジウム「魏志倭人伝を読む・纏向遺跡を掘る」  
（12月13日）
- ・図書館としての先進的な取り組みが評価され、  
“Library of the Year 2009” 優秀賞受賞  
（11月12日）



- ・図書館が奈良の紹介本作成『読み歩き奈良の本』  
（3月）
- ・中国陝西省図書館との図書館友好協定の締結  
（3月12日）



- ・生涯学習の成果発表の場を提供、「KATACHI セミナー」  
（3月28日）

## ◆平成 22 (2010) 年度 ※途中まで

- ・図書館に憩いの場としてカフェ・レストランを整備  
ライブラリーカフェ「プレーメン」オープン（4月1日）  
利用者からたくさんのご要望が寄せられていたカフェ・レストランがオープンしました。



- ・県民生活サポート第2弾として、「暮らしの法律情報」を充実  
行政書士による「無料法務相談会&知識セミナー」スタート  
「暮らしに役立つ法律情報コーナー」を一般開架棚に設置
- ・高等学校図書館（室）への「クイック（翌日搬送）サービス」を開始  
（5月～）
- ・入館者 250 万人達成  
（8月22日）
- ・平成 22 年度（第 96 回）全国図書館大会・奈良大会開催（9月16、17日）全国から約 1,700 名参加
- ・1日平均入館者数が2千人台に上昇  
①9,176人 ②1,798人 ③1,873人 ④2,014人
- ・「あなたの書棚、公開しませんか！」を実施
- ・雑誌スポンサーの募集を開始  
（西川 慶子・徳山 さおり）



## 平成22年度第96回国民読書年・図書館法60周年全国図書館大会 「温故創新-平城遷都千三百年からの発信-」

9月16日(木)、17日(金)の2日間、全国図書館大会奈良大会が開催されました。

全国図書館大会とは、年1回、公共図書館だけでなく大学・専門図書館や学校図書館など、さまざまな館種の図書館関係者が集まり、情報を交換したり、現状の課題などを共有し、意見を交わしたりすることで学び合い、これからの図書館づくりへとつなげていく大会です。奈良県での開催は、1921(大正10)年の第16回大会以来、なんと90年ぶりでした。今大会のテーマは「温故創新-平城遷都千三百年からの発信-」。2010年は、図書館界にとっても「国民読書年」「図書館法施行60周年」「子ども読書年から10周年」という節目の年でもあります。全国から約1700名ものご参加をいただき、古都奈良の地で、これまでの図書館の歩みを振り返り、そこから新しい時代の図書館としての可能性・方向を探り、創造していく機会となりました。



【全国大会全体会】

1日目(16日)は、開会式・全体会が行われました。会場は、なら100年会館大ホール。エントランスや踊り場では、全国図書館紹介ポスター展や図書館関係・後援協賛団体の展示があり、「まほろばステージ」では、「まほろばフルートオーケストラ」の演奏を楽しんでいただきました。

本大会では、図書館法施行60周年を記念して、文部科学省による「図書館法60周年図書館功労者表彰」が行われました。また、日本図書館協会理事長からは、昨年10月の東京大会以降の図書館及び図書館界をめぐる主要な動向について基調報告がありました。

奈良にご縁の深いロシア文学者の亀山郁夫氏(東京外国語大学学長)による記念講演「『黙過』から『共苦』へ—ヘッドストエフスキーと現代—」には、一般のみならずにも多数ご参加いただくことができました。

2日目(17日)は、なら100年会館をはじめ、奈良女子大学・奈良県立大学・帝塚山大学・図書情報館に分かれて16の分科会を行いました。



【全体会・記念講演】

今大会では、テーマの趣旨を反映させた以下のユニークな分科会が設けられました。

- 第14分科会 認定司書事業
- 第15分科会 国民読書年・図書館法60周年
- 第16分科会 Future Librarian

特に第16分科会では「未来のライブラリアン」のネットワーク構築に向けて、後夜祭としてプレミアセッションを開催するなど熱気につつまれた催しが行なわれました。

ほかにも障害者サービス、著作権、資料保存、図書館と出版流通など、分散会も含めると約20もの会場での、講師・発表者も100名を超える研究大会となりました。各会場では、意欲的な事例発表や活発な討議がくり広げられ、良い刺激を与え合える有意義な機会を持つことができました。

この大会で、それぞれが得たものをこれからの図書館活動に活かしていきたいと思えます。

(三宅 和恵)

## “システムだより” 館内パソコン環境を一新

館内設置のパソコンの使用環境については、開館後毎年利用者からのご意見を参考に、随時改善をおこなっています。今年度は開館5年を迎え、更新の時期となりました。10月1日に、利用者機器を一新し、以下の変更、改善を行いました。

- ・利用者端末のOSをWindows XPからWindows 7に変更
- ・ディスプレイを17inchから19inchワイドに変更
- ・Internet Explorer 7から8にアップデート
- ・Microsoft Officeを2003から2010 Professionalにアップデート
- ・フロッピーディスクについては外付けとし、貸出対応
- ・Adobe Creative SuitesをCS 3からCS 5 Design Premiumにアップデート（セミナールーム、アトリエ、編集室（オーサリングルーム）・大判印刷用）
- ・大判プリンタの機種をPX-9000から9550に変更（編集室（オーサリングルーム）・大判印刷用）
- ・ブルーレイ対応に（編集室（オーサリングルーム）・動画編集用、AVブース）
- ・Vector Works 2008から2010にアップデート（編集室（オーサリングルーム）・大判印刷用）
- ・ビデオ編集環境をHDV対応に変更（編集室（オーサリングルーム）・動画編集用）
- ・2Fコピー室のほか、3Fコピー室にもカラープリンタを設置
- ・マイクロフィルムリーダプリンタを更新
- ・セミナールームのプリンタ、プロジェクトを更新
- ・自動貸出機を更新
- ・利用者向けマニュアルの充実「大判印刷の仕方」「動画編集のご紹介」（編集室（オーサリングルーム））



新しくなったAVブース



新しくなった自動貸出機

Microsoft製品など、利用環境が大きく変更されたものもありますが、簡単パソコン教室や、ITサポートの方でも講習会を実施、計画していますので、御参加いただければと思います。今後も、社会の動向や御意見、提案等を踏まえながら、より使いやすいものとなるよう、随時改善を行っていきたいと考えています。

（川畑 卓也）



新しくなった編集室（オーサリングルーム）



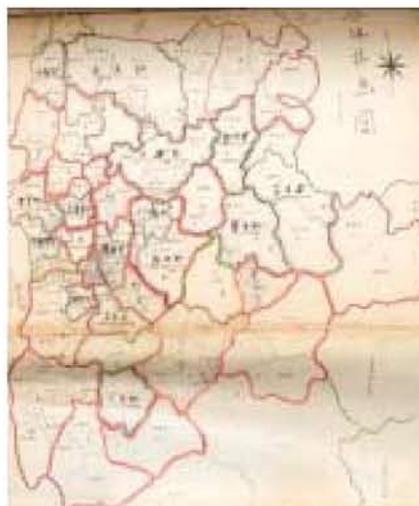
新しくなったセミナールーム

## “文書だより”「市町村廃置分合一件」

公文書館機能を併せ持つ図書情報館は、県庁各課から保存期間が5年を超える行政文書を選別して受入れています。今回ご紹介するのは、平成21年度に受入れた、昭和の大合併に関するものです。

当館が位置する奈良市大安寺西は、昭和26年に大安寺村が奈良市へ編入され奈良市大安寺町となりますが、この編入に関する資料が「市町村廃置分合一件」です。これは地方課が作成した23冊で、文書の年代、内容は以下の通りです。

- (1) 昭和15年11月～同16年3月 都跡村を奈良市、浮孔村・磐園村を高田町、筒井村を郡山町に編入。
- (2) 昭和17年1月～同23年1月 松山町・神戸村・政始村・上龍門村が合併し大宇陀町を設置、城島村と桜井町の合併、龍田町・法隆寺村・富郷村が合併し斑鳩町を設置、高田町が大和高田市となる。
- (3) 昭和25年5月～同28年5月 片桐村・伏見村・富雄村・馬見村を町とする処分、大安寺村・東市村・平城村を奈良市に編入。
- (4) 昭和28年1月～同29年1月 平和村・治道村・矢田村・昭和村・郡山町が合併し大和郡山市を設置。
- (5) 昭和29年1月～同年3月 秋津村を御所町、安倍村・多武峰村・朝倉村を桜井町に編入。
- (6) 昭和29年4月 丹波市町・朝和村・福住村・二階堂村・柳本村が合併し天理市を設置。
- (7) 昭和29年7月～同年10月 伊那佐村・桜井町笠間・同町安田を榛原町に編入、船倉村・越智岡村・高取町が合併し高取町を設置。
- (8) 昭和30年1月～同年2月 都介野村と針ヶ別所村が合併し都祁村を設置、掖上村を御所町に編入。
- (9) 昭和30年2月～同年3月 東里村・三本松村・室生村が合併し室生村を設置、南生駒村を生駒町に編入。
- (10) 昭和30年3月～同年4月 辰市村・明治村・五ヶ谷村・帯解町・伏見町・富雄町を奈良市、内牧村を榛原町に編入。
- (11) 昭和30年4月～同31年1月 瀬南村・馬見町・百済村が合併し広陵町を設置、三輪町・織田村・纏向村が合併し大三輪町を設置、秋野村を下市町に編入。
- (12) 昭和30年4月～同年5月 志都美村が合併し香芝村を設置、磐城村と當麻村が合併し當麻村を設置。
- (13) 昭和31年4月 五位堂村・二上村・下田村・
- (14) 昭和31年5月 上市町・吉野町・中荘町・国栖村・中龍門村・龍門村が合併し吉野町を設置。
- (15) 昭和31年5月～同年7月 忍海村を新庄町、金橋村・新澤村を橿原市に編入。
- (16) 昭和31年5月 箸尾町を広陵町に編入、葛城村と吐田郷村が合併し葛上村を設置。
- (17) 昭和31年9月 大福村・香久山村を桜井町に編入し、桜井市を設置。
- (18) 昭和31年9月 多村・川東村・平野村・都村・田原本町が合併し田原本町を設置、東山村・波多野村・豊原村が合併し山添村を設置、丹生村を下市町に編入。
- (19) 昭和31年9月 陵西村を大和高田市、上之郷村を桜井市に編入。
- (20) 昭和32年3月～同年9月 天満村を大和高田市、片桐町を大和郡山市、北倭村を生駒町、田原村・柳生村・大柳生村・東里村・狭川村を奈良市に編入。
- (21) 昭和32年10月 五條町・牧野村・北宇智村・宇智村・大阿太村・南阿太村・野原町・阪合部村が合併し五條市を設置。
- (22) 昭和33年3月 五條市の設置、小川村・四郷村・高見村が合併し東吉野村を設置。
- (23) 昭和33年3月 御所町・葛村・葛上村・大正村が合併し御所市を設置。
- (24) 昭和34年1月～同年4月 南宇智村を五條市、初瀬町を桜井市に編入、白銀村・賀名生村・宗檜村を合併し西吉野村を設置。



この他、昭和9年の昭和村設置、昭和38年の桜井市と大三輪町の合併に関する資料なども移管されました。これらは、私たちが住む地域の歴史が分かる貴重な資料です。

(北堀 光信)

## ●はじめに

イチゴは江戸時代の終わりにオランダから日本に伝えられました。日本での歴史はまだ浅い食べ物ですが、今ではさまざまな種類のイチゴが食卓を彩っています。そして、本来の旬は春であるイチゴが冬でも食べられるようになり、誕生日やクリスマスのケーキなど、記念の日にも欠かせない存在となっています。しかし、冬にイチゴが収穫できる促成栽培技術の発達に、奈良県が大きく寄与したことは、あまり知られていないかもしれません。

## ●栽培の歴史と技術開発

奈良県のイチゴ栽培は、大正時代から始まりました。当時はそれほど盛んではありませんでした。昭和30年代からの高度経済成長とあわせて、奈良県のイチゴ栽培も急成長していきます。経済成長にともなう所得向上にも後押しされてイチゴの需要が急増し、近隣府県が都市化・工業地化する中、奈良県はイチゴの栽培面積を拡大させ、昭和30～40年代に栽培面積全国3位となるほどの急成長でした。

当初は露地栽培、もしくはトンネル栽培（畦をプラスチックフィルムでトンネル状に覆う栽培方法）で、いずれも収穫時期は4～5月。収穫時期が短い期間に集中し、農家の負担はかなりなものでした。このために、効率の良い栽培技術が求められ、農家、研究者、行政の3者が一体となった技術開発への挑戦が始まります。なかでも早い時期から収穫が始められる促成栽培の技術は、労働力の分散による負担の軽減と、高価格での出荷が期待されました。農家主導で行われたのは新品種「宝交早生」の導入。次に行政による農業近代化のための資金援助がハウス栽培を県下へ普及させ、あわせて研究機関である奈良県農業試験場（現農業総合センター）がイチゴの生態特性の解明研究を進めました。

## ●促成栽培の実現

まずはハウス栽培という環境が収穫開始を3月にし、続く研究で、イチゴに春が来たことと錯覚させるため、11月に一旦冷蔵による低温処理をしてから保温と電気照明を与えるという方法が編み出され、2月からの収穫を可能にしました。更なる促成を目指して着眼したのは、この「宝交早生」が実際には実をつけないが年内に数輪花が咲くことがあるという

こと。苗の栄養条件などの基礎試験も行いながら、低温処理をかなり早い8月下旬から9月上旬に行ったところ、多少の促進はあったが開花にばらつきのある結果でした。しかし幸運が味方し、比較のために低温処理をせずに同時期に植えた苗が、試験場と現地試験を実施した農家で一斉に開花し始めたのです。促成栽培の決定的な場面となったこの年は昭和42年。期待した12月～1月の収穫は皆無に等しかったものの、来年への夢を膨らませてさらに試験を繰り返すことで秋口から電気照明を行うという条件を発見し、12月から3月までの収穫が実現しました。この「超常識」ともいえる栽培方法を見ようと、当時の県外各地からの視察者は引きもきりなかったそうです。

その後、オイルショック時期の省エネルギー対策、病害への対策、新品種の開発など、奈良県はたゆまぬ技術開発を続け、そして今も続けています。

## ●新品種の登場

平成21年に、「アスカルビー」から10年ぶりの新品種「古都華」を発表しました。甘くて有名な「さちのか」、「とちおとめ」そして「アスカルビー」よりも糖度が高く、酸味、香りも高い、濃厚な味わいが特徴です。奈良県農業総合センターの長年の研究の中で国内外から集めた多数の品種を掛け合わせ、その約3万株のなかの一つから生まれました。名前は250件の応募の中から「古都奈良を飾る華になるように」との願いを込めて命名されています。



新品種「古都華」（写真：奈良県農業総合センター）

### 【参考文献】

奈良県農業試験場『大和の農業技術発達史：奈良県農業試験場百周年記念誌』農業試験場百周年記念事業実行委員会 1955／奈良県いちご優良親苗増殖協議会『奈良いちご：無病苗育成対策事業とその成果』奈良県いちご優良親苗増殖協議会 1977／西本登志ほか『イチゴの新品種「古都華」の育成とその特性』奈良県農業総合センター研究報告第41号 2010／『ポスト「アスカルビー」の開発に取り組む！：奈良県農業試験場栽培技術担当イチゴ新品種開発チーム』『農耕と園芸』54巻8号 1999.8／『新品種イチゴ、「古都華」と命名 県が公募』朝日新聞2009年12月20日朝刊

（高辻 亜由美）

◆一般資料から◆

Q：江戸時代の「茶坊主」について知りたい。主に城内での仕事の内容など。

A：「茶坊主」とは、江戸幕府の職制にある「坊主」のことで、武家に仕えて茶事をつかさどる者の呼称です。「坊主」は、その職務や勤務場所によっていくつにも分かれていて、実に多くの「・・坊主」の職がありました。

江戸幕府には、大名が登城の際に、案内や着替え食事や茶の世話をする役職を「同朋」と言って、その「同朋頭」（若年寄支配）の配下に、茶部屋を管理し、將軍、大名、諸役人に茶を進めることなどを職務とする奥坊主組頭・奥坊主が100人前後と、殿中で大名・諸役人に給仕することなどを職務とする表坊主組頭・表坊主が200人前後ありました。

茶室に関する一切のことを掌る数寄屋頭（若年寄支配）の配下に数寄屋坊主組頭・数寄屋坊主が40～100人ほどがあったようです。その職務は数寄屋頭の指揮をうけて挽茶（粉末茶）を調達し、御三家や溜間詰大名などの喫茶を取り扱う事です。他に、山里茶屋などにおける茶道具一切を管掌した山里道具役や將軍飲用の茶を扱った御召仕立役などの係もあったようです。数寄屋頭は毎日登城して茶室を管理し、茶道具一式の保管や修繕を掌りました。大名や諸役人に接触する機会の多い坊主は、心付けなどの報酬が多く、家計は豊かで奢侈僭越に流れたそうです。

このほかに、寺社奉行の配下に紅葉山御宮付・御霊屋付坊主が12人、紅葉山御高盛坊主が16人、紅葉山御宮付・御霊屋付御縁側縁側坊主4人があり、二条城御殿預の配下に坊主17人があったことが知られています。

相当の御家来衆が来ると番茶や番煙草を出さなくてはなりません。享保の儉約では、坊主まで減らされ各部屋がガラ空きになってしまいました。坊主を廃止し、そのような席へ詰めることもやめになってしまいましたが、この御番の時に出る「番茶」という言葉だけが現在も残っています。

【参考資料】

- 『日本史大事典』平凡社 1992 - 1994
- 『國史大辭典』吉川弘文館 1979 - 1997
- 『江戸幕府大事典』大石学編 吉川弘文館 2009
- 『江戸武家事典』三田村壽魚 [著] 稲垣史生編 青蛙房 1958
- 『日本史広辞典』日本史広辞典編集委員会編 山川出版社 1997

(松村 順子)

◆地域資料から◆

Q：昭和元年～40年における奈良県宇陀郡伊那佐村の歴史が分かる資料を知りたい。

A：『角川日本地名大辞典』によると、伊那佐村は宇陀市榛原区石田付近にあった村で、宇陀川支流の芳野川流域に位置します。同村は明治22年に福西・池上・石田村など周辺11村が合併し、成立しました。昭和29年に榛原町の一部となり、平成18年に榛原町・大宇陀町・菟田野町などが合併し、宇陀市となって現在に至ります。

市町村の歴史を調べるとき最初にご紹介するのが、各自治体が作成した市町村史です。伊那佐村の歴史を記すものとして、同村が昭和29年7月、内牧村が翌30年4月に合併し、新しい榛原町が誕生したのを記念して作った『榛原町史』（1959年）、この町史を町制施行100周年記念事業の一環として全面補訂した『榛原町史』（1993年）があります。また、昭和以前の資料として、大正4年に奈良県が調査した「伊那佐村風俗誌料」、大正6年度に宇陀郡役所が作成した『奈良県宇陀郡史料』もあります。

当館所蔵の公文書に、「市町村廃置分合一件（7）」があります。この文書は、昭和29年に県地方課が作成したものです。平成21年度に県市町村振興課から当館へ移管されました。表題に「自昭和二九年七月至同年一〇月市町村廃置分合一件7（榛原町伊那佐村、桜井町の一部編入 高取町設置）」と記します。宇陀郡榛原町・伊那佐村・磯城郡桜井町が地方自治法の規定に基づき奈良県に町村合併を申請。同県議会の議決を経て伊那佐村を廃し、榛原町に編入したに関する起案文と添付資料などの内容となっています。添付資料は伊那佐村の人口・面積・戸数などの現況表、市町村合併実態調査表、町村合併に伴う新榛原町建設計画案などを綴じており、ここから伊那佐村が合併した経緯、当時の村の状況を窺うことができます。

【参考資料】

- 『角川日本地名大辞典』29 奈良県 角川書店 1990
- 『榛原町史』榛原町役場 1959、1993
- 『市町村廃置分合一件（7）』奈良県庁文書 1954

(北堀 光信)

## 陝西省図書館訪問記

2009年に締結された中国陝西省図書館との友好協定締結を記念し、本年6月に、陝西省図書館主催の「陝西省図書館・奈良県立図書情報館友好協定締結記念国際学術シンポジウム 文物を語る－長安と奈良」が陝西省図書館で開催されました。当館の千田稔館長が講師として招かれ、訪中しました。

6月13日早朝に出発し、上海を経由して、現地昼過ぎに西安咸陽空港に到着。旅装を解き、謝林陝西省図書館館長他関係者と旧交を温めました。翌14日は、図書館職員の案内のもと、陝西省歴史博物館などを訪れ、陝西省の歴史をたどり、その後、浙江工商大学の方々との交流会に参加しました。15日には、早朝、長安城に登り、西安市内を一望し、その後、陝西省図書館を訪問しました。地上12階立て、正面の大階段の前に立つと、その巨大さに圧倒されるとともに、多くの来館者が行き交う様子にも活気が見られました。

陝西省の人口は3,642万人余り、面積はほぼ日本と同じで、その省都西安市は人口約720万人、図書館の規模もこのようになるのかと納得してしまいました。



陝西省図書館正面外観

千田館長は、館内見学に先立ち、陝西省文化庁の余青宵庁長、蔣惠莉副庁長と会見し、今後の両館を通じた文化交流をさらに活発化することを改めて確認しました。

その後、館内が案内されましたが、蔵書数400万冊、閲覧席が2,000席以上と、外観に違わない巨大な施設ですが、そのほとんどのスペースが、利用者で埋まっているのも壮観でした。ちなみに陝西省図書館は、年中無休で一部例外もあるようですが、開館時間は、8時30分より20時30分の12時間開館です。3階には、海外から送られた図書コーナーが

あり、日本の図書をはじめ、当館とも縁の深いドイツの図書コーナーも目を引きました。当館の創立100周年記念書籍『読み歩き奈良の本』も開架されていました。

この日の午後、「陝西省図書館・奈良県立図書情報館友好協定締結記念国際学術シンポジウム文物を語る－長安と奈良」が図書館ホールで開催されました。蔣惠莉副庁長、謝林館長、前駐中国大使阿南惟茂氏の挨拶の後、千田館長が「隋書倭人伝を再読する」と題して講演。続いて西北大学教授王維坤氏が「正倉院銀盆に見る唐代の中日文化交流」、また陝西師範大学教授の拜根峇氏が「井真成墓誌から見た中日文化往来」、浙江工商大学教授の王勇氏が「随文帝と遣隋使」と題し、それぞれ講演を行いました。



講演中の千田館長

それぞれの立場から日中の文化交流の歴史を改めて議論する有意義な会でした。終了後には、千田館長のもとに、多数の聴講者が訪れ、質問やサインを求める列ができていました。日本に対する関心もさることながら、参加者の熱気が伝わるシンポジウムでした。

翌16日、朝から西安市のシンボルでもある小雁塔などを訪れ、西安咸陽空港へ移動し、帰国の途につきました。

平城遷都1300年の今年、そのモデルとなった西安（長安）の今昔を目の当たりにしつつ、これからの相互交流に思いをはせる訪問となりました。

（乾 聰一郎）

## 超!図書館 事業展開の軌跡

### 入館者250万人達成!

奈良県立図書情報館は、今年11月3日、お陰様で開館5周年を迎えました。

それに先立ち、8月24日には、開館以来の入館者が250万人に達しました。250万人目の入館者は、奈良市在住の三口智史さんで、ご家族で初めて来館



250万人目の入館者、三口さんご一家

したということでした。達成期間もどんどん短くなっており、日平均の入館者数も2,000人余りと着実に増えています。

### さらに充実、音楽イベント

開館5周年の今年は、開館5周年記念コンサートをはじめ、例年にもまして音楽イベントの多い年となりました。

11月3日、開館5周年記念「西谷牧人・岩谷祐之デュオコンサート」が開催されました。2回公演で約700名余りの方々に、バッハ、ヘンデルという古典の大家から、イザイ、コダーイという現代音楽家の珍しいプログラムで、新たな出会いを提供していただきました。奈良出身の気鋭のソリストによる力演でした。



西谷牧人・岩谷祐之デュオコンサート

これまでのコンサートを振り返ってみましょう。6



サマー・ゴスペル・コンサート

月12日、韓国の女性シンガーイネリさんを招き、「サマー・ゴスペル・コンサート」を開催。

7月25日には、開館5周年、シュ

ーマン、ショパン生誕200年を記念し、昨年に引き続き「ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル弦楽四重奏のタベII」を開催しました。



ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル弦楽四重奏のタベII

8月7日には、地元万年青年クラブとの共催で、「奈良女子大学管弦楽団団員によるサマー・イブニ



ファミリーサマーコンサート

ング・コンサート」を、さらに、8月22日には、「ファミリーサマーコンサート～金管五重奏の魅力～」を開催しました。

新たな出会いが新たな情報への入り口を開く、図書館こそそれにふさわしい発信拠点だと考えています。

### 多彩なイベント

今年には平城遷都1300年という記念すべき年でした。5年目を迎えた千田稔館長による館長公開講座「図書館劇場」も、遷都1300年にふさわしく、「平城京をめぐる群像」をメインテーマに、キーパーソンから平城京の時代を探る6回講座を開催しています。



図書館劇場V

(本年度のラインナップ)

- 第1幕 藤原不比等と元明天皇
- 第2幕 長屋王と行基
- 第3幕 聖武天皇と光明皇后
- 第4幕 孝謙(称徳)天皇と藤原仲麻呂
- 第5幕 鑑真と吉備真備
- 第6幕 光仁天皇と桓武天皇

また、奈良出身の落語家桂文鹿さんプロデュースによる図書館寄席も2年目。「花鹿乃芸亭」として“語られる書籍”の醍醐味をさらに発信しています。



図書館寄席「花鹿乃芸亭」

また、読売新聞大阪本社との共催で開催された「平城遷都1300年



奈良・読書の旅第5回

奈良・読書の旅第5回」では、作家の帯木蓬生さんを迎え、トークと読者との交流で、作品と奈良の魅力が浮き彫りにされました。

相談事業もさらに充実。済生会奈良病院瀬川院長による「医療・健康相談会」をはじめ、「しごと相談」、「創業・新事業展開相談会」、「法務無料相談会」などを開催しており、関係資料の提供もあわせて行い、専門分野と図書館をつなぎ、気軽に相談できる展開を目指しています。



医療・健康相談会

さらに、奈良県出身の童話作家 花岡大學の作品朗読会「花岡童話を愛でるつどい」、古着を使った現代アートワークショップ「西尾美也ぶつぷつぞうふくワークショップ」、「天体望遠鏡工作・星空観望会」など多彩なラインナップで利用者の好奇心を触発しています。年明けには、「自分の仕事を考える3日間」、「古楽器によるヒストリカル・ウインド・アンサンブルコンサート」など、まだまだ多彩なプログラムが続きます。

## 企画展示・図書展示

さまざまな関係機関や団体、企業とタイアップして開催される企画展。社会の動向にも素早く対応し、所蔵資料をさまざまな切り口で紹介する図書展示。今年もいろいろな仕掛けで、来館者を触発しています。

### ★図書情報館から全国に発信！★



奈良県立図書館創立100周年記念書籍「読み歩き奈良の本」のほか、全国から若者が集まる「自分の仕事を考える3日間」フォーラムから生まれた西村佳哲(働き方研究家)著「自分の仕事を考える3日間I with 奈良県立図書館情報館」、「みんな、どんなふうに働いて生きてゆくのか？—自分の仕事を考える3日間II— with 奈良県立図書館情報館」(弘文堂刊)が全国の書店で発売されています。来年秋には、3冊目が刊行される予定です。

また、県立図書館創立100周年記念グッズもインフォメーションカウンターにて好評発売中です。



### 【主な企画展】

- 「鎮目直樹・バードカービングの世界」 (4/1～29)
- 鈴木悠斎の花札 せんとあしゅらの1300年展 (5/1～16)
- ツイン・タイム・トラベル「イザベラ・バードの旅の世界」写真展 (5/18～6/13)
- 「世界スマイル計画II～チャッピー岡本のカプリモノとダンボール家具展～」 (6/15～7/4)



- 「かんれきものかんれき式」展 (8/28～9/12)



### 【主な図書展示】

- 「大和の桜紀行—奈良から吉野へ—」 (4/1～22)
  - 「漢字の成り立ち—白川静生誕100年—」 (4/1～29)
  - 「上海1842—2010 アヘン戦争から万博まで」 (5/15～6/6)
  - 「2010年 図書deワールドカップ」 (6/8～7/8)
  - 「民俗学・文化人類学者 梅棹忠夫氏を悼む」 (7/8～22)
  - 「日本の美 大和の美との出会い—白洲正子生誕百年—」 (7/13～31)
  - 「情熱の浮世絵師—葛飾北斎生誕250年—」 (8/1～31)
  - 「池波正太郎—没後20年—」 (9/1～10/7)
  - 「書道界の風雲児 榊莫山さん逝く」 (10/7～21)
  - 「土と遊ぶ—草花から家庭菜園へ—」 (10/1～31)
- (乾 聰一郎)

## 編集後記

復刊第3号の奈良県立図書館報うんていをお届けします。

本号は図書館情報館が開館して5年目という節目の年に当たるとともに、全国図書館大会奈良大会が平城遷都1300年祭で盛り上がる奈良市において開催されるといふ記念すべき年を反映して、誌面においても「図書館情報館開館5周年の歩み」、「超！ 図書館 事業展開の軌跡」、「全国図書館大会奈良大会」といった記事を掲載しました。

また、昨年度友好協定を締結した中国陝西省図書館の訪問記も載せています。

連載の各記事とともに、皆様からのご感想やご意見をお待ちしております。

## 奈良県立図書館報 うんてい (うんてい復刊) 第3号

発行日 平成22年12月28日  
 発行人 千田 稔  
 発行所 奈良県立図書館情報館  
 〒630-8135 奈良市大安寺西1丁目1000  
 TEL.0742-34-2111 FAX.0742-34-2777